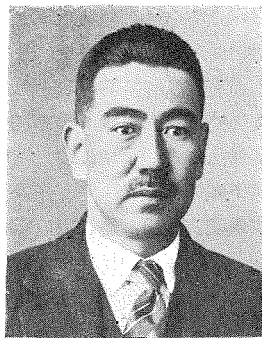


關東水力佐久發電所工事記錄の連載にあたりて

鶴田勝三

今さら關東水力の佐久發電所工事報告を連載するなどとは餘りに古物を擔ぎ出したといふ嫌ひが無いでもありませんが、實はこの原稿は工事完成後書いたもので、其の當時財界不況の爲何處にもあまり水力工事起業の話もなく、こんな時は自分の實驗談を皆さんに御披露する時機に非ずとして、其儘机の抽出しに藏ひこんで置いた處、其後眞壁調整地堰堤基礎の漏水止注入法の經驗から、磐城炭礦の坑内湧水防止に成功した事に就て此の記事を發表する様な御勧めにあづかり、又水力工事再起の時運にも追々向つて來た様な感じも致しますので最初に脱稿した關水工事から漏水止注入に至るまでを連続掲載して、後に一卷として纏めたならば、是から工事を始めやうとなさる方々の一助ともならうかとの老婆心からおこがましくも筆を執る事に致しました。

凡そ如何なる工事でも設計から施工完了迄完全無缺のものとは無く、關水も又この例



に漏れず、是等の事も發表したいと思つて居りましたが、事會社の内情に亘り誤解を招くが如き事があつてはならぬと差控えて居りました處、發電開始以來滿五ヶ年の星霜を経た

今日迄、終始何等の故障なく極めて良好なる發電状態を持續し、事業の信用とみに厚く、其の基礎盤石の如くなつた今日、施工責任者である私が、其の工事の結果に對し自評を發表することは何等の疑惑を生ずる事もなく、又私としても今考へて色々意に滿たなかつた節々を此處に申述べて自分の不徳を謝し、併せて今後同じ事を世人

が繰返す事の無い様望んで止まない次第であります。(昭和八年十二月四日)

〔編者曰〕鶴田氏の原稿は編輯部の手許まで頂いてあります。本號にはその第一章取水工事に就き掲載の豫定でありましたが、記事幅員の爲次號から本題に入る事になりました。尙本篇は全卷通し頁にして後で一冊にまとめる様にする計畫です。